『國民新報』1939年10月1日

[主張]　新秩序の根本原理

　はによりてにがされつゝあるあるの一である。ののをとづけるのであるが、をばのはにするのだとしてる。らががをばとするのはらずしもからばかりとはへない。となればには八一のがされず、ののをてのをるからである。

　々のとか、とかはとかふものは、そのには々のがあるとはへ、そのをなすものはのであつて、そのはローマのからしたものとへるとう。ややキリストのはれもののをへて、のためにをしうすることをへたのであつた。かゝるのはとばれてるものであるが、このこそはのをなしてり、それが千ししてにりののためにとなつてれめたのである。

　こゝにいては々のののしとふにする。ちばのにらされたをして[[1]](#footnote-1)の々ののにることである。ちはにへはにへらはにへ、して々はつてにへるのにることだ。はにしてをし、はにしてをし、はにしてをし、々はににしてのをするとふことが、に々がつてつたところの、つてちにしなければならないところのなのである[。]のののがされなければ、にずるののも生れることはない。してやくのをしてのたらしめんとするのにいておやである。

　がするややは、てとより『かつた』であつて、ので『した』ではない。がやでさへもとからのかりである。のはのによつてもくされた[。]はののであらねばならぬ。々々ののであらねばならぬ[。]してのこそはをふべき八一の[な]のだ。々が四ののににいてつてると云ふは、のによつてのみされるであらう。

1. 単行本『同胞に寄す』では「道義主義」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-1)